

# 平成三十一年度入学試験

## 試験問題

### 国語

#### 注意

- 一、開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 二、受験番号を解答用紙の三カ所<sup>1</sup>に書き、答えはすべて**解答用紙**に書きなさい。
- 三、問題は **1** から **6** までで、九ページにわたって印刷してあります。  
なお、問題用紙のほかに別紙があり、表に**別紙1**、裏に**別紙2**が印刷されています。
- 四、終了のチャイムが鳴ったら、すぐに筆記用具を置きなさい。

1

次の①～⑧の傍線部分について、漢字は読みをひらがなで書き、ひらがなは漢字に直しなさい。

- ① 会社に便宜を図る。
- ② 国から県へ管轄を移す。
- ③ 社会に警鐘を鳴らす。
- ④ 制服は会社が貸与する。
- ⑤ 皆に事のぜひを問う。
- ⑥ こうふんして顔が紅潮する。
- ⑦ 日々の練習をおこたる。
- ⑧ 言いかけた言葉をさえぎる。

2

別紙1の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

問1 傍線部分(1)「少し皮肉な笑みを浮かべた」とありますが、「皮肉な笑み」はタケルのどのような行動に対して向けられたものですか。タケルの行動が具体的に書かれた箇所を二十字以内で抜き出して書きなさい。

問2 文中の[A]と[D]に当てはまる言葉として、最も適当なものをそれぞれ次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア じつとりと    イ 悠々と    ウ 黙々と    エ ぐんぐんと    オ ぐるぐると

問3 傍線部分(2)「やれやれ。龍一は軽く頭を振りながらも、そのリクエストに corres pond するべくプールサイドの角を両手でつかむと、勢いをつけて両足で思い切り壁を蹴った」とありますが、龍一がタケルのリクエストに応えたのはなぜですか。四十字以内で説明しなさい。

問4 傍線部分(3)「寝」とありますが、「寝」を正しい筆順で書く場合、次の黒塗りの部分は何画目ですか。漢数字で書きなさい。

寝

問5 この文章からうかがえる龍一の性格について説明したものとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 一年生に丁寧教えるタケルに積極的に協力しようとする優しい性格。
- イ 本当は一年生に丁寧教えたいが、照れくさくてできない引つ込み思案な性格。
- ウ 周りとかかわることなく、自分の課題を一つ一つこなしていく几帳面な性格。
- エ 自分の力を伸ばしたいと考えていて、周りと協力するのが苦手な性格。

3

別紙2の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

問1 文中の **I**・**II** に当てはまる言葉として、最も適当なものをそれぞれ次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 足し算      イ 掛け算      ウ 引き算      エ 割り算

問2 傍線部分(1)「不完全なる美」とありますが、日本人が不完全な美を好むのはなぜですか。その理由について述べている一文を抜き出し、初めの五字を抜き出して書きなさい。(句読点や記号も一字に含む)

問3 傍線部分(2)～(5)の中で他と活用の種類が異なるものを一つ選び、その番号を書きなさい。

問4 文中の (A)～(D) にはそれぞれ接続詞が入ります。その中で異なる働きをするものを一つ選び、その記号を書きなさい。

問5 本文の内容と合うものを、次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 時空を超えて、作品や作者と触れ合えるのは世界共通の美の不可思議さである。
- イ 作品と一体となれるということは、作者の世界観を共有できることである。
- ウ 日本人は移ろう季節の中に生きてるので、朽ちることのない美しさを求める。
- エ 日本では美の味わい方が西洋と異なっているので、美しくないものも大事に残す。

4

次の漢詩を読んで、あとの各問いに答えなさい。

早<sup>つと</sup> 発<sup>ス</sup> 白<sup>ニ</sup> 帝<sup>ニ</sup> 城<sup>ヲ</sup> 一<sup>一</sup> ※  
李白 ※

朝<sup>あした</sup> 辞<sup>ス</sup> 白<sup>ニ</sup> 帝<sup>ニ</sup> 彩<sup>ニ</sup> 雲<sup>ノ</sup> 間<sup>一</sup> ※

千<sup>チ</sup> 里<sup>リ</sup> 江<sup>カ</sup> 陵<sup>リ</sup> 一<sup>ニ</sup> 日<sup>ニ</sup> 還<sup>カ</sup> ※

両<sup>リウ</sup> 岸<sup>アン</sup> ノ 猿<sup>エン</sup> 声<sup>シヨウ</sup> 啼<sup>イ</sup> 不<sup>レ</sup> 住<sup>マ</sup> ※

軽<sup>ケイ</sup> 舟<sup>シュ</sup> 已<sup>ス</sup> 過<sup>グ</sup> 万<sup>マン</sup> 重<sup>チュウ</sup> ノ 山<sup>サン</sup> ※

朝に辞す白帝彩雲の間

千里の江陵一日にして還る

兩岸の猿声

輕舟已に過ぐ万重の山

(唐詩選)

注(※)

白帝城 白帝山上にあった古城

朝 早朝

江陵 今の湖北省江陵県、長江の北岸に位置する

李白 唐代の代表的な詩人の一人

彩雲 朝焼け雲

万重山 たくさんのお山々

問1 この漢詩の形式を次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 五言絶句 イ 五言律詩 ウ 七言絶句 エ 七言律詩

問2

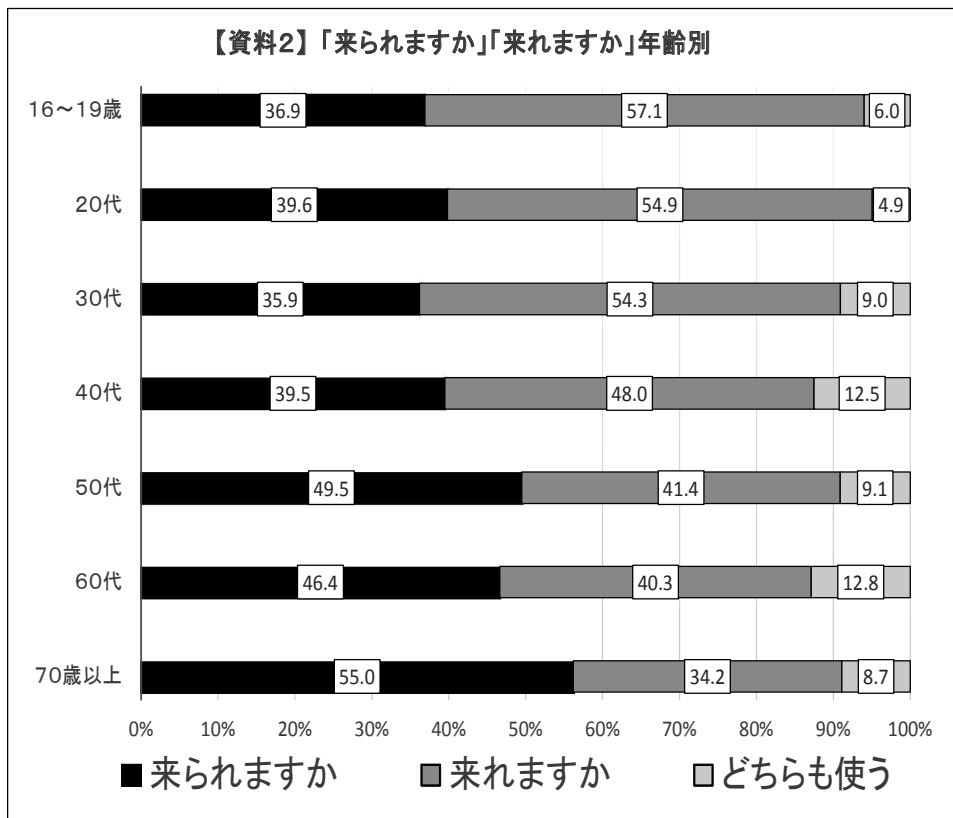
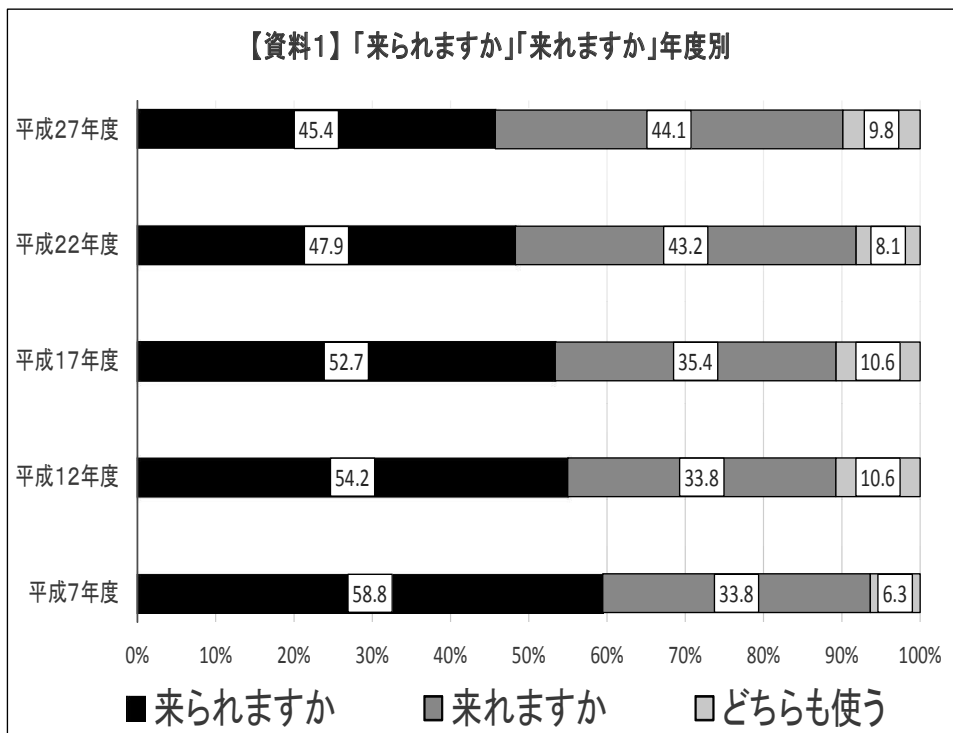
には、傍線部分「啼不<sup>イ</sup>住<sup>マ</sup>」の書き下し文が入ります。傍線部分を書き下し文に直しなさい。

問3 この漢詩の中には、空間と時間を表す言葉の対比によって、スピード感が感じられる行があります。その対比の言葉を漢詩の中からそれぞれ二字で抜き出して書きなさい。

問4 この漢詩は罪に問われた李白が、奥地に流されている途中の白帝城で赦ゆるされて、江陵に戻った時の作品です。この漢詩に表現されている李白の気持ちとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 眼前に迫り来る山々に、自分の生涯を重ねて誇らしく思う気持ち。
- イ 兩岸から聞こえてくる猿の声に、くつろいでゆったりとした気持ち。
- ウ 色鮮やかな雲に見送られ、解放感と喜びにあふれた爽快な気持ち。
- エ 美しい白帝城との別れを惜しみ、今の境遇に心から感謝する気持ち。

5 次の文章と資料を読んで、あとの各問いに答えなさい。



出典「平成27年国語に関する世論調査（文化庁）」

次の【資料1】と【資料2】は、平成二十七年に文化庁が全国の十六歳以上の男女を対象に行った「国語に関する世論調査」の結果である。  
 【資料1】によると、過去の調査結果（平成七、十二、十七、二十二年度）と比較すると、「来られますか」「来れますか」を使う人の割合は（A）傾向にある。「来れますか」は平成十二年以降（B）傾向にあったが、平成二十二年度調査から今回の調査ではあまり変化が見られない。  
 【資料2】によると、「来られますか」は四十代以下で三割台となっている。「来れますか」は、があり、四十代以下では、「来られますか」を九〜二十ポイント上回っている。



問1 文中の（A）（B）に「増加」または「減少」のいずれかを書きなさい。

問2 文中の  部分には、どのような言葉が入りますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 年代が低いほど高くなる傾向
- イ 年代が低いほど低くなる傾向
- ウ 年代が高いほど高くなる傾向
- エ 年代による違いは見られない傾向

問3 【資料1】と【資料2】の考察として適当なものを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 【資料1】によると、「来られますか」と「来れますか」のどちらも使う割合が最も多いのは平成二十七年度である。
- イ 【資料1】によると、「来られますか」の割合が五割を下回るのは平成十七年度からである。
- ウ 【資料2】によると、「来られますか」の割合は、若い世代になるにしたがって低くなる傾向がある。
- エ 【資料2】によると、「来られますか」と「来れますか」の割合が逆転するのは、四十代から五十代にかけてである。

## 6

読書について、次のような考え方があります。

「数多くの本を読むよりは、むしろ一冊の本をじっくり読む方がよい。」

この考え方についてあなたの考えや意見を、あとの〔注意〕にしたがって書きなさい。

〔注意〕

- ① 題名は書かずに本文から書き出しなさい。
- ② 「賛成」「反対」など、あなたの立場を明らかにして書きなさい。
- ③ あなたの体験や見たり聞いたたりしたことを具体的に書きなさい。
- ④ あなたがそう考える理由を必ず書きなさい。
- ⑤ 原稿用紙の正しい使い方にしたがって、全体を百六十字以上二百字以内にまとめなさい。

これで問題は終わります。

## 別紙 1

ざぶりと水に飛び込み、腕を遠くへ遠くへと突き出す。

得意のクロールであつたという間に二十五メートルを泳ぎきり、龍一がプールサイドを振り返ると、そこには既に見慣れた光景があつた。

明るい髪色の少年が、「先輩、先輩」と左右の後輩たちから腕を引かれていた。

遠目にも片えくぼが目立つ柔らかな雰囲気の子は、運動部の主将というよりテレビに登場する「体操のお兄さん」といった様子だ。

龍一は水中眼鏡を引き上げ、(1)少し皮肉な笑みを浮かべた。

「良くやるよ……」

それは龍一が幼馴染みのタケルに対し、何度となく呟いてきた台詞だつた。

まだ小学生のあどけなさを残す一年生たちにまわりつかれながら、タケルは一人一人に丁寧なアドバイスをしているようだった。

くせのない穏やかな声が、風に乗って龍一のところまで届く。「息継ぎが心配なら最初は背泳ぎがいい。顔を水につけなくていいから呼吸が楽だよ。呼吸は吸うより吐くほうに集中すれば自然とできるからね」

どうやら背泳を教えているらしかった。

タケルはしなやかに腕を回しているが、一年生たちは腕を強張らせたまま扇風機のように、やたらめったらA振り回す。

「背泳ぎはね、ただ腕を回せばいいんじゃないよ。腕を水に入れたら肘から先で水を押すんだ。腕を伸ばして掌を下にして、水の上にはんと置いたら、肘から先を使って水を押し……。そう、回すんじゃないくて、押すんだよ」

「先輩、こう？」

「そう。そうだよ。できてる、皆ちゃんとできてるよ」  
プールサイドに笑顔がはじける。

最初はバカにしながら見ていたのだが、まるで基礎のできていなかった一年生たちが、みるみるうちに背泳ぎの基本ストロークをマスターしていく様に、龍一は少々驚いた。

そのとき、プールサイドのタケルが自分を見た。

「龍一！ お手本を見せてよ！」

「はあ？」

「やって見せてよ、背泳ぎ」

「俺の種目はクロールだけど」

「リュウならなんだって完璧なフォームで泳げるでしょう？」

(2)やれやれ。龍一は軽く頭を振りながらも、そのリクエストに

応えるべくプールサイドの角を両手でつかむと、勢いをつけて両足

で思い切り壁を蹴った。仰向けにジャンプして、水中に滑り込む。そしてバサロキックで一気に加速する。

どうだ、バサロだ。少しはびっくりしたか。水泳部の選手だったら、これくらいの技量は持っていて当然だ。

それからB水面に浮上し、タケルが言ったとおりの優雅なストロークを繰り出してやった。龍一は、両肩をローリングさせながら、水を切るように進んでいった。

気持ちがいい。

プールサイドの一年坊主なんて知ったことではない。

そもそも自分が水泳を好きなのは、それが自身の実力一個で勝負ができる、個人競技であるからだ。できない連中に脚を引っぱられて無駄に苛々する必要もないし、第一水の中では他人と口をきくこともない。

水に入ったら、他人のことなど関係ない。相手にするのは自分だけだ。

大体泳げもしない連中が、水泳部に入ってくるな――。

自分の考えに浸りながら水をかき分けていくうちに、しかし、龍一は途中でふと異変に気がついた。

水に手応えがなさすぎる。それにコースロープがいつの間にか消えている。

疑問を感じた瞬間、ゴーグル越しに見上げていたはずの青空が、※ハレーションを起こしたように白く光る。

その途端、龍一は自分の体にC重力がかかり、急速に引き戻されていくのを感じた。

気がつくとも龍一は、薄暗い部屋の中で、天井を見つめて横たわっていた。自分の体を包み込んでいたたゆたう容積が消え、代わりに背中にはD汗ばんだ(3)寝床の感触があつた。先の情景が夢だったのか、回想だったのかは、当の龍一にも判然としなかった。外では雨が降っているようだ。トントトンと、不規則にペランダの手すりが叩かれる音がする。まだ夜は明けていない。雨音は、何かの囁きのように急にぐくもったり強くなったりした。

ここに引き戻される直前、龍一はタケルが自分の名前を叫ぶのを聞いた。

龍一！ お手本を見せてよ！――

その明るい声と、自分を振り仰いだ茶色い髪の輪郭が、脳裡から離れない。

龍一は夢とも記憶ともつかない残像をつかみとろうと、掌を宙に突き出した。しかし、眼が慣れてきたのか、残像の代わりに、天井の木目が滲むように視界に定着していった。

それでも龍一は、掌を上げたまま、まだぼんやりとしていた。

(古内一絵著「快晴フライング」より)

注(※)

ハレーション＝強い光の当たった部分のまわりが白くぼやけること

何を美しいと感じるかは個人差があります。しかし、日本人には、共通した「美しさに対する普遍的な価値観」がある、と私は思っています。それは、西洋の価値観とはまったくちがっています。

西洋の美に対する考え方は、基本的には「1」とっていいでしょう。そのときによって、技法であったり、素材であったり、加工であったりしますが、それらをどんどん足していく。たとえば陶器なら、技法を凝らしてかたちを整え、ふんだんに色の素材を使って柄を描き、さらに加工をほどこして作品をつくりあげる……という手法をとるわけです。

一方、日本は「2」。茶器などでも、いったんつくりあげたかたちから、そぎ落とし、そぎ落とし、「もう、これ以上そぎ落としたら茶器として成り立たない」というところまで「引いて」いくのです。

両者の決定的なちがいは、西洋の美が「完全なる美」「完成された美」であるのに対して、日本の美は「1」「2」不完全なる美」、さらにいうならば、「完全を超えた不完全なる美」であることです。

陶器でいえば、西洋ではかたちが左右対称だったり、描いた柄に寸分の狂いもないものが美しいとされる。

(A)、一方で、茶道で②使われる茶碗を見てみてください。日本ではかたちがいびつだったり、柄に統一がないものを美しいとします。その「不完全さ」に、つくり手の思いや人間性を汲みとり、不完全であるところに素材の力や味わいを感じとるのです。これは禅の考え方そのものだといっているでしょう。禅にはいくらか修行を③積んでも終わりということがありません。ここまで修行したら完全だ、これでもう修行は完成された……ということがないので、完全でないから、不完全だから、修行はどこまでもかぎりなく続きます。であるからこそ、そこに、もっと高みを④求めて自分を究めていく、無限の可能性を⑤見出すのです。

禅語に「百尺竿頭進一步」(百尺竿頭に一步を進む)というものがあります。これは長年の修行で会得した境地に安住することなく、さらに高みに向けて修行を続けてゆくことの大事さを意味しています。日本の美もこれとまったく同様の考え方をするので、完全なもの、完成されたものの美しさは、いつてみればそこが「終結点」です。誰が見ても、「ああ、美しい」という受けとめ方をする。

一方、「完全」を超えた「不完全なもの」の美しさには、見る人の想像力を掻き立てる余地があります。

「なぜ、作者は「こ」をいびつなままにしたのだろうか？ そこにどんな気持ちを含めたのだろうか？」

と、想像がさまざまに広がります。

窯で陶器を焼くときに、焦げ跡が陶器に焼きつくことがあります。

その焦げ跡を「景色絵」として楽しむ、というのも、日本の陶器ならではの。つくり手の意図どおりではない、偶然生まれたその柄にさえ、日本人は意味を見出すのです。しかも、美しいものは残し、美しくないものは完成されていても割ってしまう。「美しさの正解」は、非常にあいまいなものにもかかわらず……。

見る人の数だけ美しさがある、とっていいでしょう。もちろん、作者の真の意図がどこにあったかはわかりません。でもそれは、それぞれが感じたままでもいいのです。

感じることで作品と一体になれる。そこが大事なところなんです。一体になれるということは、作者の世界観を共有できることでもあるからです。

どんなに時代が隔たっていても、時空を超えて、作品ばかりではなく、作者とも触れ合える。完全を超えた不完全な、日本の美だけが持つ不可思議さです。

### 移ろうのか、壊れるのか

「無常」という言葉がありますが、日本人の心の底には、「移ろう」という感覚がつねにあるのだと思います。日本人は、文字どおり、移ろいでいく季節のなかに生きています。そのことが、「無常観」を自然に持つことになった、もともとも大きな理由だということはいままでもないでしょう。

(B)、移ろいでいくことが美しいと感じるのも、日本人に特有の感性かもしれません。たとえば、彫刻でも、西洋では石や金属、鋳物でそれをつくります。ところが、日本では仏像などにして、多くが木でつくられています。

どちらが変化しやすいかは説明するまでもありません。

西洋では時間が経過してものが変わっていくことを、朽ちてしまふとか、壊れてしまふ、と感じます。ですから、変化しにくい石や金属、鋳物を用いる。

(C)、日本人はそれを移ろいでいると捉え、そこに美しさを見出します。古びた木の仏像に、一部が朽ちた像に、ときを移し込んだ新たな美を感じる。「味わい」といってもいいかもしれません。

日常的な場面でも、この彼我の差はあらわれます。

美しい器が割れてしまった——。西洋なら、それがどんなに高価なものであっても、自分が気に入ったものであっても、その時点でお払い箱です。壊れたものなど使い道がない、もう、何の価値もない、とするのが西洋流なのです。

(D)、日本人は、割れることも移ろいのなかの「変化」と捉えます。そこで、その変化をも活かすことを考えるわけです。



